

贈り物を捨てることへの抵抗感に同一化が与える影響の検討

－拡張自己および贈り主の分身化に注目して－

問題と目的

物質的に豊かな現代において人々は入手したモノを捨てられないという悩みを抱えており、捨てづらいモノとして贈り物が挙げられる。本研究ではモノに対して入手や所有の過程で意味づけがなされることに着目し、「自分の一部」や「贈り主の分身」と意味づけることが捨てることへの抵抗感に与える影響を検討することを目的とした。また、贈り主に対してなされる共感が贈り物を捨てることへの罪悪感と関連する可能性から、個人特性として共感性の観点からも検討をおこなった。

方法

過去に贈り物を貰った経験のある大学生を対象に、Google Formsで質問紙調査を実施した。18歳から30歳までの94名（女性63名、男性30名、性別不明1名）から回答が得られ、すべてを分析対象とした。質問紙は、(1)フェイスシート、(2)贈り物を捨てることへの態度に関する項目、(3)過去にもらった贈り物に関する項目、(4)共感性に関する項目で構成された。

結果と考察

分析の結果、贈り物を捨てることへの抵抗感には、「自分の一部」「贈り主の分身」という意味づけが影響することが示された。同時に検討した他の意味づけにおいても、「擬人化」以外のすべてが抵抗感に影響することが示された。ただし、捨てるかどうか迷っている贈り物を捨てるときの抵抗感には特定の意味づけをしていることはあまり影響しておらず、意味づけが保たれたまま捨てられている可能性が考えられる。共感性については、他者指向的な情緒的共感をしやすい人ほど、贈り物を捨てることを困難と考えていることが示された。共感性の高さは「贈り主のかけた時間や労力（手間）、お金、気持ちが入っている」と意味づけることと有意な関連はなく、贈り主への同情によって喚起される罪悪感から困難さが感じられている可能性がある。今後は、捨てるか迷っている贈り物と捨てた贈り物に意味づけの差がなかったことから、意味づけを保ったまま捨てるためにどのような行動がとられているのか検討していくことが必要であるといえる。

芸能人の不倫への誹謗中傷に対する許容度

—個人特性との関連と探索的研究—

問題と目的

炎上や誹謗中傷は芸能人の不祥事などが原因で発生し、ネット上で拡散される現象である。先行研究では、拡散する人たちの存在が非常に重要であることが指摘されてきた。本研究では芸能人の不倫に焦点を当て、芸能人の不倫への誹謗中傷に対する許容度とその規定要因について検討した。具体的には、(1) 欲求不満と芸能人の不倫への誹謗中傷に対する許容度との関連（欲求不満—攻撃仮説を応用）、(2) 類似性と芸能人の不倫への誹謗中傷に対する許容度との関連（私憤仮説などをもとに）、(3) 共感性と芸能人の不倫への誹謗中傷に対する許容度との関連、(4) 芸能人の不倫における誹謗中傷を過激化させるポイントや性差の関連（探索的）を検討した。

方法

2023年11月3日から2023年11月10日の間にGoogle Formsを用いた質問紙調査を実施し、18歳から49歳の男女97名（男性：34名、女性：63名、平均年齢22.93歳、 $SD = 3.85$ ）から有効な回答が得られた。質問紙は、(1)フェイスシート、(2)一般人の不倫に対する許容度、(3)芸能人の不倫に対する許容度、(4)芸能人の不倫への誹謗中傷に対する許容度、(5)特定の芸能人の不倫への誹謗中傷に対する許容度、(6)芸能人の不倫への誹謗中傷を過激化させる要因、(7)人生満足度、(8)共感性、(9)人格特性で構成された。

結果と考察

分析の結果、欲求不満と芸能人の不倫への誹謗中傷に対する許容度との関連は見られなかった。また、性格の類似性が高いほど誹謗中傷に対して怒りと悲しみを引き起こしやすく、特に社会的望ましさが高い人は誹謗中傷を許容しないことが示唆された。そして、共感性が高い人ほど芸能人の不倫に対する誹謗中傷を許容しないことも示唆された。加えて、子どもの有無や芸能人のイメージが誹謗中傷を過激化させると思われ、男性は女性よりも不倫を許容しやすいという結果は先行研究と一致していた。誹謗中傷を許容する人は少ないが、許容の捉え方は人によって異なることが考えられ、誹謗中傷の許容をより具体的に提示し、一般人との比較を通じて芸能人に特化した調査を進めることが必要である。

親密な存在による強迫性障害 (OCD) 症状への影響

問題と目的

強迫性障害 (OCD) は強迫観念と強迫行為による精神障害であり、OCD の下位尺度には確認、疑念、優柔不断、清潔の 4 つがある。OCD は強迫的信念の他、ネガティブな気分や特性不安、自尊心が OCD の発症と維持に影響していることが報告された。本研究では、暴露反応妨害法以外の OCD 症状軽減方法として、ネガティブ感情や自尊心などと関連する友人関係について調査する。また「清潔」については、清潔度との関連も調査し、物理的な OCD 症状の軽減に関する「物理仮説」について、友人と家族の違いも含めて検討をした。さらに、友人の量が自尊心や精神的健康、OCD 症状とどのように関連するかも検討した。

方法

大学生を対象に Google Forms による質問紙調査を実施し、80 名(男性 23 名, 女性 57 名, 平均年齢 20.3 歳, $SD = 2.88$)から回答を得た。質問項目は、(1)フェイスシート、(2)過去 5 ~6 ヶ月の友人の数、(3)「確認」に関する質問、(4)「確認」の強迫行為の中断、(5)「疑念」に関する質問、(6)「疑念」の強迫行為の中断、(7)「清潔」に関する質問、(8)「清潔」の強迫行為の中断、(9)清潔そうに見える人に関する質問、(10)家族に関する質問、(11)家族のうち、あまり清潔とはいえない人物、(12)友人に関する質問、(13)友人のうち、あまり清潔とはいえない人物、(13)自尊心、ネガティブ感情、不安の質問から構成された。

結果と考察

分析の結果、「疑念」のみ、親密な人との関わりが OCD 傾向を軽減させることが示唆され、「疑念」は項目内容からして親密な人と共にいることの OCD 傾向が軽減しやすいと考えられた。また、親密な人の存在が強迫行為の中断によるストレスや不安を軽減する効果も確認された。「清潔」について、心理仮説は不支持だったが物理仮説の「清潔」は支持された。共同生活の期間や同居の有無が影響せず、「親密な人の物である」という安心によって OCD 傾向が軽減すると考えられた。一方で、友人の量が OCD 傾向に直接的な影響を与えることは確認されなかった。

研究の結果から、親密な人との関わりや物理的な安心感が OCD 症状の軽減に寄与する可能性があり、OCD 症状の軽減のための新たな観点を提供したと言えるだろう。

時間の使い方と主観的な効率の良さとの関連

—時間コントロール感・タイムマネジメントスキル・先延ばし傾向に着目して—

問題と目的

普段の生活で時間は不可欠であり、学生や社会人は様々な制限時間に直面している。社会的には、タイムマネジメントやタイムパフォーマンスが重要視されている中で、時間に関する研究では時間知覚や時間評価、時間概念・時間的展望、時間管理、時間活用性などが検討されている。タイムマネジメントはその中でも時間の管理・活用方法に関する概念である。また本研究では、効率を「ある一定時間内に課題をどれだけ効率的にこなすか」と定義し、時間コントロール感や先延ばし傾向から効率について検討した。

方法

Google Forms を用いて web 上で回答を求め、男女 147 名、平均年齢 23.2 歳、 $SD = 6.95$ を有効回答とした。質問項目は(1)フェイスシート、(2)時間コントロール感尺度、(3)時間管理尺度、自作の(4)効率尺度、(5)先延ばし尺度から構成された。

結果と考察

研究目的は、時間コントロール感、タイムマネジメントスキル、先延ばし傾向が効率向上に与える影響を検討することであった。仮説 1「時間コントロール感が高い傾向にあるほど、タイムマネジメントスキルが高ければ効率が高い」は、時間コントロール感や時間管理が効率へ正の効果をもたらすことが明らかになったものの、支持されなかった。仮説 2「先延ばし傾向がある人に関して、タイムマネジメントスキルが高ければ、効率も高い」は一部支持された。しかし、先延ばしの定義や分類など、改善の余地がある。時間コントロール感とタイムマネジメントスキル、および効率についての検討はより詳細な分類と細分化が必要とされる。有意差や有意傾向が認められなかった要因としては、信頼性係数の低さも関連している可能性があると考えられた。

物語に触れた経験と共感力の関連

—他者への許容力に着目した検討—

問題と目的

本研究では、小説や漫画、アニメ、映画など様々なエンタメに触れる機会が多い中で、物語に触れることを通して登場人物の視点に立つ経験が、実際に他者とコミュニケーションをとるうえでの「共感力」の向上につながるのではないかと考え、物語に触れた経験と共感力との関連について検討を行った。物語世界に没入した経験と共感力の関連、触れた物語のジャンルや媒体による共感力の程度の差異のほか、物語に触れた経験と許容力の関連についても検討を行った。

方法

大学生を対象に Google Forms による質問紙調査を行い、18 歳から 23 歳の男女 117 名(男性 52 名, 女性 65 名, 平均年齢 19.97 歳, $SD = 1.53$)から回答を得た。質問項目は、(1) フェイスシート、(2) 対人反応性指標(想像性、視点取得、共感的配慮、個人的苦痛)、(3) 共感力の発揮、(4) 物語に触れた経験、(5) 許容力から構成された。

結果と考察

分析の結果、物語の没入経験と共感性、特に想像性、共感的配慮との間に有意な関連が認められた。これは、物語に触れて登場人物の心情を想像することが実際に他者に対する共感力につながっている、もしくは、他者への想像性や配慮に長けていることが、物語に触れることを積極的に行える要因であることを示唆している。また、触れた物語の一部のジャンルや媒体と共感力との間に関連が認められた。ファンタジーや恋愛・ロマンスと、共感性全体、想像性、共感的配慮、共感力の発揮について正の相関がみられた点について、恋愛・ロマンスに関しては比較的身近な題材に対して読者が自身を投影しやすいのではないかと推測された。物語に触れた経験と許容力については、有意な関連は見られなかった。許容力をはかる質問群が、他者を心理的に受け入れる許容の要素と共に実際に行動としてのコミュニケーション能力なども関連するような内容であったことにより、明確にデータに現れなかったものと推測された。

オンラインの話し合いはなぜ疲れるのか？ —オンライン講義・対面の話し合いとの比較を通して—

問題と目的

本研究では、ビデオ会議の中でも、オンラインの話し合い場面に焦点をあて、オンライン講義場面と対面の話し合い場面との比較を通して、オンラインの話し合いの疲労や、その疲労の先行要因について検討することを目的とした。また、ビデオ会議疲れ(Zoom Fatigue)と公的・私的自意識との関連についての検討や、年齢によって場面ごとのビデオ会議疲れの先行要因とビデオ会議疲れに差があるかについて探索的に検討した。

方法

Google Forms を用いた質問紙調査を実施し、17歳から81歳の男女170名(男性:47名, 女性:118名, その他:5名, 平均年齢34.94歳, $SD = 19.12$)から回答を得られた。質問紙は、(1)フェイスシート、(2)オンラインの話し合いの場面を想定した ZEF 尺度(Zoom Exhaustion & Fatigue Scale)とビデオ会議疲れの先行要因についての質問、(3)オンラインの講義の場面を想定した ZEF 尺度とビデオ会議疲れの先行要因についての質問、(4)対面の話し合いの場面を想定した ZEF 尺度とビデオ会議疲れの先行要因についての質問、(5)公的・私的自意識尺度、(6)これまで経験したオンラインでのビデオを使用した話し合いについての質問で構成された。

結果と考察

調査の結果、オンラインの話し合いとオンラインの講義、対面の話し合いで、場面ごとに疲れに差は無かったが、オンラインでは、見た目を気にしやすく、身体言語の把握が困難だと示された。また、若年層はオンラインの場合、見た目を気にしやすく移動や準備が面倒で、特にオンラインの話し合いでは、ビデオ会議疲れが大きいことが示された。一方、高年層は、オンラインの話し合いでは移動や準備の面倒さが小さく、ビデオ会議疲れが小さいことが示された。さらに、公的自意識が高い人は、ビデオ会議疲れが大きいことが示された。よって、自分の外見を気にしやすい人は、オンラインでの話し合いが疲れやすいということが示唆された。

今後、ビデオ会議の特徴である、自分の映像が画面に映っていることによる影響や、話し合い中に自分の外見を気にすることによる影響について、検討が必要だろう。また、本研究ではビデオ会議疲れの先行要因について、信頼性の低い因子が含まれていた。信頼性が高く、ビデオ会議疲れの先行要因を十分に網羅した尺度の確立が求められる。

自律性援助的養育が自尊心と仮想的有能感に及ぼす影響への検討

—年齢段階ごとの比較を用いて—

問題と目的

本研究では、養育スタイルの1つである自律性援助が現在までの養育においてどのように行われているのか、また、自律性援助の認知が自尊心や仮想的有能感にどのように関連しているのかについて検討し、養育者の自律性援助という養育態度が現在の自己のとらえ方へどのような影響を与えるのかについて明らかにすることを目的とした。具体的には、大学生の自律性援助の認知を“生まれてから10歳(小学校中学年)程度まで”、“11歳(小学校高学年)から15歳(中学校3年)程度まで”、“16歳(高校1年)から現在まで”の三段階に分けて測定し、どの発達段階、年齢段階での親からの自律性援助的養育が大学生の自尊心と仮想的有能感に関連しているのかについて質問紙を用いて検討を加えた。

方法

大学生を対象とし、Google Formsを用いてweb上で回答を求めた。調査参加者は回答から大学生以外のものを除いた18歳から24歳の135名(男性:66名,女性:69名,平均年齢21.04歳,SD=1.60)を有効回答とし扱った。質問紙は、(1)フェイスシート、(2)自律性援助尺度、(3)仮想的有能感尺度、(4)自尊心尺度で構成された。

結果と考察

自律性援助についての先行研究を参考に2因子構造と6因子構造で相関分析を行った。その結果、三段階全ての年齢段階の「自律性援助因子」に有意な強い正の相関があることが認められ、仮説のうち「各年齢段階で行われる自律性援助の認知は関連がある」は支持された。この結果から、養育者によって行われる自律性援助的養育が全年齢段階に共通して行われていることが示唆された。

二つ目の仮説であった「生まれてから10歳程度までの養育者の自律性援助と自尊心には関連がある」は支持されなかった。自尊心と仮想的有能感を用い、2因子構造と6因子構造での相関係数を算出した結果、2因子構造では、“16歳程度から現在まで”の「自律性援助因子」と自尊心との間にのみ弱いながらも有意な正の相関が認められたが、“生まれてから10歳程度まで”の「自律性援助因子」と自尊心との間にも有意な相関はみられなかった。6因子構造においても、“生まれてから10歳程度”において自律性援助を指す「選択肢の提供」、「要求の制限と根拠」、「気持ちの確認」と「自尊心」間に有意な正の相関は認められず、養育者の自律性援助と自尊心には関連があるという仮説2は支持されなかった。しかし、全年齢段階において「成績へのプレッシャー」と「仮想的有能感」の間に有意な弱い正の相関がみられ、成績へのプレッシャーという支配的養育態度が仮想的有能感に幼少期から今まで関連することが明らかにされ、仮想的有能感において幼少期から現在までを通しての養育態度の重要性が示された。

大学生のアルバイト経験とリフレクション傾向の関連

—集団経験に着目して—

問題と目的

本研究ではアルバイト経験が大学生にとってどのような影響を及ぼしているのか、経験から学び、次なる課題へと対応するために必要なリフレクションを用いて社会人にとって必要な考え抜き、対応する力を身につけることはできるのかを検討した。集団でのアルバイト経験とリフレクション傾向との関連を、アルバイト以外の集団経験と比較しながら検討することを主な目的とした。また、アルバイト経験とリフレクション傾向を理解するため、内的要因として自己効力感、外的要因として上司の指導性、複合要因として職務満足を用いて、要因によってどのような差が生じるのか関連から検討した。

方法

大学生を対象に Google Forms を用いた質問紙調査を実施し、18 歳から 23 歳までの男女 198 名 (平均年齢 20.13 歳, $SD=1.51$, 男性 71 名, 女性 127 名) から回答が得られた。質問紙は、(1) フェイスシート、(2) 経験に対するリフレクション、(3) 人格特性的自己効力感、(4) アルバイト経験、(5) 職務満足度、(6) 上司の指導性で構成された。

結果と考察

分析の結果、集団アルバイト経験と対するリフレクション傾向の原因究明因子に僅かな正の相関が認められた。今回の調査では、アルバイト経験が他の集団経験と比較して唯一年齢による影響を受けず、相関が認められた。この結果は、アルバイトが社会的責任や金銭の授受が行われるため課題解決を行っていくことが求められやすく、原因追及との相関が認められたと推察した。一方で、気持ちの整理は理論的な課題解決に必要なものではなく、著しく業務を阻害する程度でなければ緊急を要して振り返るものではないと考えられる。

以上の結果から、集団アルバイト経験は経験に対するリフレクションとの関連があることが示された。集団経験をコミットメントや取り組みへの主体性などから具体的に測定することで、経験に対するリフレクションとの関連について深く検討していく必要があるだろう。

集団への否定的な評価を受けた際のネガティブ感情

—自己肯定感の影響に着目して—

問題と目的

部活動にて顧問から部員全体の練習への取り組みの態度に対する叱責など、集団への否定的な評価を受けることがある。その評価の対象に自分自身が含まれているのか不明瞭な場合、自分も含まれていると思えば感情が低下する、もしくは自分には関係がないと思えば感情が低下しないように、評価の受け取り後の感情は変化するのではないだろうか。

本研究の目的は、この感情の低下を調整する要因として自己肯定感と社会的比較志向性、評価者との関係性、所属集団との関係性のそれぞれとの関係を挙げ、これらが評価後の感情にどのような影響を与えるのか検討することとした。

方法

中学生・高校生の頃での部活動にて、試合・大会に向けてチームで練習をしていた経験のある大学生を対象に Google Forms を用いた質問紙調査を実施し、有効回答として 136 名 (男性：53 名，女性：83 名，平均年齢：19.93 歳， $SD=1.35$) から回答を得た。質問紙は、(1)フェイスシート、(2)自己肯定感尺度、(3)社会的比較志向性尺度、(4)部活動に関する項目、(5)顧問への信頼尺度、(6)集団同一視尺度、(7)集団への否定的評価尺度で構成された。

結果と考察

分析の結果、「ネガティブ」因子は自己肯定感尺度と有意な中程度の負の相関、社会的比較志向性尺度と有意な中程度の正の相関が認められた。一方、「ポジティブ」因子は顧問への信頼尺度と有意な弱い負の相関、集団同一視尺度と有意な弱い負の相関が認められた。

さらに、「ポジティブ」因子を従属変数、自己肯定感尺度、社会的比較志向性尺度、顧問への信頼尺度、集団同一視尺度を独立変数として重回帰分析を行った。その際、各独立変数を交互作用項とした。その結果、自己肯定感×顧問への信頼の交互作用が有意傾向のため、下位検定として単純傾斜の検定を実施した。その結果、自己肯定感高群は顧問への信頼が高いほど、ポジティブ感情が弱くなる傾向が認められた。

以上の結果から、否定的な評価後は自己肯定感が高い人でも良好な評価者との関係性により感情が低下するため、相手の受け取り方を考慮しながら評価をするべきと示唆された。

大学生における集団への所属と離脱の選択

—選択の要因の探索的調査—

問題と目的

大学生は所属する集団を自由に選択できる機会が多い。部活やサークル、アルバイトなどが挙げられ、活動に参加し始めるタイミングもそれぞれで、それらを辞めることについても、学校や会社を辞めることよりもハードルが低い。また、近年は雇用の流動化が進み、一度就職した後に転職することも珍しくない社会になっている。さらに、所属集団における適応感は精神的健康と関連していると言われている。自分に適した集団を見つけるためには必要に応じて合わない集団から離脱することを選択する必要があると考えられる。しかし、集団への適応の研究は多くとも、集団からの離脱に関する研究はあまり行われていない。そこで本研究では、離脱の側により焦点を当て、関係流動性や自尊感情、自律性、主導性などを用いて、集団への所属と離脱を選択する要因について探索的に調査した。

方法

大学生を対象に Google Forms を用いた質問紙調査を実施し、18歳から23歳の男女127名(男性：46名、女性：80名、無回答：1名、平均年齢：20.67歳、 $SD=1.41$)から回答が得られた。質問紙は、(1)フェイスシート、(2)集団所属の経験、(3)適応感尺度、(4)想定場面における集団所属と離脱の選択尺度、(5)自尊感情尺度、(6)自律性尺度、(7)主導性尺度、(8)関係流動性尺度で構成された。

結果と考察

分析の結果から、関係流動性の「関係形成・解消の自由度」が高いことで多くの集団と関わりを持つことが示された。また、集団において適応感が高いことで居心地が良く、所属が長くなり、適応感の一部が自尊感情の高さに影響を与えていることが示唆された。集団への所属と離脱について、「活動内容の不適合」場面において、男性の方が女性よりも集団を辞める傾向が高いことが分かった。また、集団への所属と離脱を決定する要因として、目的達成の能力である主導性が大きな影響を与えていることが示された。

本研究の結果から、何のためにその集団を選択しているかを意識することが、自分に適した集団を見つけ、必要に応じて離脱するために必要であると考えられる。